

歯科医療と

*S*PORTS



月刊 **アポロニア²¹**

1998年11月号・別刷

学校、地域で歯牙防護の取り組みを

—東海地区、スポーツ・健康づくり歯学協議会—

愛知県歯科医師会専務理事 坂井 剛氏

スポーツにおける歯牙の損傷をいかに防ぐかという問題については、近年その必要性が現実的問題として、日本歯科医師会代議員会においても強調されるようになった。スポーツ人口の高まりとともに、それによる外傷が問題となっているからだ。

スポーツへの取り組みを全国に先がけて行なっているのが、愛知県歯科医師会。そのなかで、歯牙防護の必要を学校、地域に普及させようとしている。その取り組みの中心にある同会専務理事、坂井剛氏に概要をうかがった。氏は、「マウスガードの調整を歯科医師が行なうべき」とかねてから主張している。

2つのアプローチがある

—1980年代以降、国民の各層にさまざまなスポーツが広がっています。日本医師会がすすめるスポーツ医学は、ターゲットを主として高齢者においており、さらに広く全身のリハビリを含めた対応をすすめて高齢者の健康増進に役立てようとしています（資料1）。

歯科では、どのような層をターゲットとすべきなのでしょうか。

坂井 歯科医療とスポーツのかかわりについて考える際には、2つのアプローチがあると思います。すなわち、ひとつは競技スポーツなどで、より高い成績をあげる運動能力を達成するために歯科はどのような貢献ができるのかということ、もうひとつが、学校、地域で日常的に行われるス

スポーツと歯科との関係です。

スポーツ機能と

歯の関係の研究

—愛知県歯科医師会では、その両方について対応がなされていますね。すでに、研究の体制整備については、愛知県に関連の研究機関が設置されています。

坂井 いずれにせよ、まだ端緒にすぎないばかりです。前者については、歯科的処置によって、その人の持つ運動能力を、現在その持っている力の5割しか発揮していないのならば、それを8割にできないかを考えるというもので、どちらかと言えばこちらが先行しました。すでに県の施設である「あいち



● 日本医師会スポーツドクター意識調査 ● — 「活躍の場がまだない」との声 —

日本医師会の健康スポーツ医制度は、平成3年に発足、現在、地域保健活動の一環としてその振興方策を検討している。平成9年度に実施されたアンケートの結果は以下の通り。(有効回答者数は、1,163名中684名-58.8%)

1. どのような医師が「スポーツ医」となっているのか

日医認定「健康スポーツ医」は、男性が多く、年代としては40歳代から60歳代。専門科目は、内科と整形外科、一般外科が絶対数で多い。創設以来7年を経た「健康スポーツ医」制度だが、資格取得からの年数は、「5年」とするものが最も多く、平均4.1年。

2. メリットはあるのか

「健康スポーツ医」の資格取得によって、何らかのメリットがあったかとの質問に対しては、4割以上が何らかのメリットを感じている。そのなかにおいては、「診療に知識が役立った」が41.8%となっている。

1日の患者数のうち、1割以上が健康スポーツ医学に関係するとするものは、18.3%あった。

3. 現在の「健康スポーツ医」としての活動 (複数回答)

「現在は活動していない」は28.9%に止まる。「急性の整形外科的疾患の治療」(27.2%)、「慢性の整形外科的疾患の治療」(27.0%)、「内科的疾患治療の運動療法」(25.1%)などとなっており、全体の6割以上が何らかの活動を行っている。

困っている点として「活動の場がない」とするものが40.4%で最も多い。その他、「一般診療のため時間が取れない」(36.1%)、「経営的に採算が合わない」(21.9%)、「時間がかかり過ぎる」(20.2%)との回答。活動の場、経営面での制約などが浮き彫りとなっている。

4. 「健康スポーツ医」としてかかわっている施設・団体 (複数回答)

「現在はない」が58.3%で圧倒的に多い。

かかわっている施設は、「学校」(12.1%)、「競技団体」(10.8%)、「スポーツ施設」(6.0%)、「民間健康増進施設」(5.7%)、「公的健康増進施設」(5.4%)、「企業」(5.3%)、「市町村保健センター」(4.5%)で、多岐にわたっている。

5. 「健康スポーツ医」をどのように活かしたいか

(複数回答)

「一般診療のなかでの生活指導」が62.3%と最も多い。ほぼ同様の回答として「地域全体の健康増進や予防」(50.1%)などとなっており、一般診療や地域医療のなかでの取り組みの重要性を示す。

一方、「児童生徒の健康管理」(37.9%)、「企業(職域)での健康増進や予防」(28.5%)で、「学校医」「企業医」としての活動についても、その重要性が示唆された。

6. 必要とされる方策

「最も重要」との回答が最大なのは、「健康スポーツ医組織と活動の場との連携」で33.2%(複数で90.4%)。さらに、都道府県、郡市区単位での研修会などの開催については、複数回答で「必要」が実に89.2%となっている。「保険点数の拡大」についても要望が多かった(83.2%)。

7. 高齢社会への対応

日常外来患者のうち高齢者(65歳以上)の割合は、回答の約7割で「2割以上が高齢者」であることを示す。そして、「健康スポーツ医」が高齢者への運動療法の是非をどのようにとらえているのかを聞いたところ、73.7%が「患者の状態による」とした。なお、11.3%に「後期高齢者(75歳以上)は控えるべき」との回答が見られた。

高齢者へのスポーツ医療の実施状況については、半数が何らかの活動をしていることが明らかになった。内訳は「日常生活全般に関する指導」(33.9%)、「慢性整形外科的疾患の治療」(21.8%)、「内科的疾患の運動療法」(20.3%)など。

今後の展望としては、「一般診療のなかで」(81.7%)、「生活指導」(76.9%)や「健康管理」(57.7%)に活かしたいと考えているものが多い。

日医では、「健康スポーツ医」のターゲットエイジを主に高齢者としているが、それ以外への対策について「学童期から必要」とするものが、63.7%で圧倒的に多い。

健康プラザ」に歯科測定室が作られ、運動能力と歯科領域の健康との関わりを調査しています。ここでは治療は行わず、もっぱら咬合力の測定などを行います。また、財スポーツ医科学研究所に歯科室を設けることができました。スポーツ医科学研究所は第3セクターのようなもので、県内の財界、行政当局、そして県内なども出資して設立したものです。

ここには、19床を有する整形外科の有床診療所があり、歯科室はここに設置されています。これまでは咬合力と健康との関係などの調査・研究が中心でしたが、治療を含めた取り組みを期待されています。すなわち、スポーツによって顎変形を起こした場合や、他の歯科外傷による障害の治療、リハビリを行うこととされています。

プロ野球や競輪の選手も治療に訪れますので、貴重な基礎データが得られます。具体的には、テンプレートを入れることで、どの程度運動能力が向上するのかといった研究です。この分野はまだ未知のところが多く、一流の選手をサ

「スポーツ・健康づくり歯学協議会」設立趣意書
Dental Conference of Sports and HealthPromotion : SHP協議会

これまでの歯科サービスは、医療にかたよりがちでした。今後の歯科サービスは、歯科医療だけでなく、疾病の予防に始まる健康づくり等の広い範囲のサービスが求められることが考えられます。

今回、口腔の健康づくりの増進を目指すとともに、全身の健康増進をもその視野に含めたスポーツ・健康づくり歯学協議会を発足させるに至りました。

愛知県には、あいち健康プラザ、財団法人スポーツ医・科学研究所等の施設があり、共に全国的にも他に例をみない愛知県および東海地方が全国に誇りうる独創的な施設です。

本協議会の内容は、まず、口腔の健康づくりに関連する活動や研究の振興を目指すとともに、口腔から全身への健康づくりの進歩、発展、普及を図ります。また、本協議会は、8020運動を推進するための一手段として、スポーツ医学およびスポーツ歯学と連携を取りつつ、スポーツ外傷から歯および顎顔面口腔組織を守るためのマ

ウスガードの作製及び調整を、各歯科医院でできるようにすることもその目標のひとつに捉えています。このような医学的および歯学的観点から学術委員会を設置し、口腔および全身の健康づくりに関する学術研究および研修会、情報の収集と提供等をマウスガードの作製方法等も含めて行います。また本協議会は口腔から全身への健康づくりのアプローチとしてよく噛むことなどの啓蒙・啓発活動も行ってまいります。

以上の事業を展開することで、歯科のこの領域に対する理解が深まるものと思われれます。

つきましては、できるだけ多くの皆さまに本協議会に参加していただき、この事業を推進していきたいと考えております。

【同協議会設立総会（予定）】

平成10年11月21日（土）愛知県歯科医師会館

なお、関係者によれば、この活動について幅広い賛同を求めるとしている。

ンブルにした試験によって、有意の結果が得られればと思います。

現在、スポーツ歯学を研究する研究者は存在しますが、いかんせん大学に講座がありません。そのため、学会を結成することもままならないのが現状です。まだ始まったばかりですが、この試みが、そのような現状に一石を投じることでできればと願う次第です。現在、スポーツ歯学とは公衆衛生や補綴などさまざまな専門家の研究のカラージュの様相ですが、それらを有機的に活かしよう方策はないものかと試行錯誤の段階です。

さて、後者は、むしろ一般の子どもを対象に、マウスガードの普及を中心として体育教育における安全性の確保を関係各方面との協力により推進しようというもので、現在、こちらに力点をおいています。ただ、どちらも「歯科医療を通じた健康づくり」を目的にしたもので、スポーツはその中に含まれるものと認識しています。

8020が原点に

——一般向けの「スポーツ・健康」の取り組みとはどのようなも

のですか。

坂井 このたび愛知県歯が呼びかけて、東海4県（愛知、岐阜、静岡、三重）歯科医師会で、「スポーツ・健康づくり歯学協議会」を発足することになりました。平成10年11月21日に初の総会を開催します（資料2）。

この発想の原点は、やはり8020運動でした。そこで広く必要性が強調されはじめたのが、生涯を通じて「歯を失う」リスクをできる限り防止することです。歯牙欠損の原因は、結局のところむし歯、歯槽膿漏、そして外傷による破損です。

むし歯や歯槽膿漏以外の原因で歯が失われるということに、これまで歯科医師はあまり関心がなかったようです。一般においても、外傷による歯牙欠損が防止できるなどと考えていなかったのではないうか。協議会が考えているのが、少し表現は適切かどうか疑問ですが、この「外傷を「予防」する」ということなのです。

現在では、マウスガードが発達しており、一方でスポーツの広がりがあります。このため、小さい

時からサッカーやラグビーといった激しいスポーツに触れる機会が増加しています。この段階で歯をきちっと守ろうというのが、この協議会のねらいの一つです。

——小中学生のうちから、激しいスポーツをする人が増えつつあるのが歯を失う理由となりうるリスクの増加につながっているのですね。

坂井 子どものうちから激しいものを含む多様なスポーツに接する機会が増えたことで、外傷による歯牙欠損が増加しつつあります。事実、学校歯科医からのデータによれば、学校での体育の授業中に限っても、そこで発生する外傷のうちで、「歯を折った、抜けた」といった歯科に関するものが最も多いということです。

歯科医師による

マウスガード調整

——一方、マウスガードの発達が子どもの歯に及ぼす影響は何ですか。

坂井 問題なのは、これが一般のスポーツ用品店で盛んに販売されていることです。これらの多く

は、歯についての専門知識を持つ歯科医師が適合させるものでなく、使用者がおのおの調整して作るものとなっています。

そこで、そのようなマウスガードを装着している人について聞いたところ、ちゃんとした調整ができていないために、逆にそれが原因で咬み合わせがおかしくなりしたという事例が相当あると判断されます。

——子どもを対象にした場合、どこに注意すべきなのでしょう。

坂井 成長期の変化に対応したきめの細かい調整が不可欠です。それには、最初の段階から歯科医師による確実な製作が必要です。そして継続的な点検も歯科医師によってなされるべきです。

次第に使用する人が増えているにもかかわらず、それが専門家の手を経ない、適合の悪いものであることが多いのです。これはかえって害を及ぼすものであり、大きな問題です。

大人の、プロスポーツなどで使用する場合は、自分の責任で行うことです。必要があれば歯科医

師のアドバイスを受ければよいのですが、子どもの場合はそうはいきません。これらは学校など教育の場でなされることであり、周囲の、例えば学校歯科医や地域の歯科医師の責任は大きいと考えます。

——地域の歯科医師が日常の診療において、患者として来ている子どもに「ラグビーを始めたい」などという話が聞ければ対応できるかもしれませんが、実際にはなかなか難しいのではないですか。

坂井 確かに、地域において学校やスポーツクラブなどスポーツが行われる場と歯科医師が協力することが必要です。しかし、現状ではそれら学校側、クラブ側ともに、そこでの指導者に、マウスガードについての知識が十分でないと思われる。

そこで今回の協議会では、学校の教諭、教育委員会関係者、地域のスポーツクラブの指導者らにも参加してもらい、そのような知識の普及をすすめてようと考えています。彼らに強調したいのは、マウスガードも一つの「防具」であるということ。それを付けさせない